

おはなし ポチとお團子

小野直

貨物自動車は、ブウブウ、ガタ／＼と、向ふの方から走つて來ました。その、貨物自動車には、

大根や、午莠や、お諸が積んでありました。ガタガタ、ブウ／＼と、道の悪いところを走つて來ましたので、荷物の上につんであつた圓いものが一つころ／＼ところがつて道の真中に落ちました。それを一番に見つけたのがポチです。ポチは、おなかがついてゐたので何かおいしいものが慾しかつたのです。そのおいしいものをお團子だと思ひました。

「あやー、何か落ちてゐる。お團子らしいぞ。

お團子だとうれいな。圓い／＼、確にお團子だ。」

ポチは側に來てにほはうとしますと、自動自転車がやつてまゐりました。

「ブウ／＼、バタ／＼／＼。危ない／＼。ブツブツ。」

ポチは驚ろいて道の端によけました。自動自転車は、おいしいものすぐ横を通つて行きました。

「あゝ、よかつたな。お團子を轢かずによかつたな。さあ、お團子をいそいで食べやう。」

さういひ乍ら、ポチが、おいしいものすぐ上まで、鼻をよせた時に、兵隊さんのお馬が澤山並んで元氣よく駈て來ました。バカバカ／＼、バカバカバカ、

兵隊さんは、大きい聲で、おいもをにほつて居るポチを叱りました。

「のかぬと、危い。」

ポチは、ビツクリして道の端によけました。そして見ると、お馬が澤山なので、きつとあのお團子はふまれるに違ひないと思ひました。

「危ない。團子だ。ふんでは、いけない。」

「危ない、團子だ。ふんではいけない。」

ポチはお團子をふまれさうで心配なものですから、つゞけさまに、聲をかけてゐました。

「危い團子だ。ふんではいけない。」

「危い團子だ。ふんではいけない。」

「危い團子だ、ふんではいけない。」と聞くとびつくりして一層かけだすお馬もありました。お馬は、皆行つてしまひました。おいもは無事に助かりました。ポチはよろこんで

「やれ／＼、心配した。まあ／＼よかつた。折角

見つけたお團子だもの。ふまれたら惜しいことだ。」

といひながら、おいもをかいで見やうとすると人力車が走つて來ました。ポチはそれには氣がつきません。車屋さんは、

「ホイ、ホイ、車だ、車だ。」

さういつた上に、鈴をチリリン／＼／＼と鳴らしましたので、ポチは、びつくりして飛びのきました。車屋さんはおいもをよけて駈けて行きました。

ポチは、お團子がつぶされなかつたのでよろこびました。

「よかつたな。運がいい。」

ポチは、お團子が食べた／＼つて、もうながくは辛棒が出來ません。早く食べた／＼つて／＼ならぬのに、又車が來ました。その次に、乗合自動車が來ました。その次に、牛乳屋の車が來ました。

その次に、のそくと牛が來ました。牛は、その
 あいもを見つけて、立ちどまつて食べやうとしま
 した。

「危あやい！、お團子なまだい。ふんではいけない。」

とポチがいひました。牛は

「ふみはしない。たべるんだよ。」

「食べちやいけない。僕わんだよ。」

「僕わのだ、さうだ、僕わのだよ」

ポチは、ワン／＼、ワン／＼と吠うえました。

すると、牛を牽ひいてゐたおぢさんが、「シッシッ
 と牛を叱なつてお尻しを鞭むちで打うちました。すると、牛
 は仕方なしに、あいもをぼんと蹴けつて、行いつてし
 まひました。

あいもはころ／＼と、道の端はまで轉まんで來きまし
 た。ポチは大よろこびです。

「やれ／＼こゝなら大丈夫。ゆつくり食べやう。

あいしどうなち團子。」

それから一口かんで見ますと、「ガリッ」、「オヤ」
 今いま一口たべて見ますと、「ガリッ」、「おや」。「かたい
 ぞ」。ポチがよく／＼見ますと、よほどおなかの
 すいた時ときでないと食べない、生なまのあいもでした。
 「なんだ、生なまのいもか。團子なまぢやないのか。なん
 だ。つまらない」

さういひながらも、ゴリ／＼、と皆食くてしまひ
 ました。

生なまのあいもを食べてしもふとほんとうのお團子
 がほしくなりました。それで、あうちへ歸かつて、
 おさんといふねえやに、貰もらはうと思おもひました。

「ねえ、ねえや、僕わちだんごが、ほしいの。」

「ねエ、ねえや、僕わ、おだんごが、ほしいの。」

「ねエ、ねえや、僕わ、おだんごが、ほしいの。」

ねえやは、ポチが、お庭にわをついてあるくのが、う
 るさくなりました。

「あゝ、ポチは、うるさいね。」

「ねエ、ねえや、僕、おだんごがほしいの。」

「うるさいね。ポチは、朝御飯は、もうすぐぢやないかい、まつといで。」

「ねエ、ねえや、僕、おだんごがほしいの。」

「そんなにうるさいと、水をぶつかけるよ。」

「ねエ、……………僕……………」

「水、水、」

「ねエ」

たうとう、ねえやは、ポチに水をかけました。

ポチは、身體をぶる／＼とふるはせて水をおとしそれから、小屋に、はいつて、おだんごがたべたい／＼と思つてゐました。

そのうちに、お座敷の方で、お嬢さんおやうがポチを呼びました。ポチはお嬢さんが大好きですポチは大いそぎに駆けて行きました。

「ポチ、／＼／＼」

「あゝ、来たか／＼。」

「さあ、ポチ。お行儀のおけいこだよ。」

「ねエ、……………僕、おだんごが食べたいんです。」

「さあ、いゝかね、これをとつてくるんだよ。」

さういつて、木片きざれをお庭の木の間に投げこみました。ポチはすぐに取つて來ました。

「あゝ、偉きい／＼。さあ、今一度。」

今度は、お池のむかふかには、まりを投げました。ポチは大よろこびでまりをくわへて來ました。

「まあ、お前いつそんなに、おりこうになつたの。」

「……………」

「ぢや、御褒美ごほうびをあげるよ。」「まつといでよ。」

お嬢さんは、大きいおだんごを二つもつて來ました。ポチは、うれしくつて／＼。とびあがつてよろこびました。

「やあ、お團子だ／＼。」「うれし／＼。」

「じつとしてあいぞ」

お嬢さんは、おだんごを一つ下に置いて、「おあづけ」といひました。「おあづけ」の時は、ポチはどくなにほしくつても食べないお約束をしてあります。ポチは、じつとそのおだんごを見てゐるとひとりでによだれが、たら〜と出て來ました。ポチの口がだん〜おだんごのそばによつて行きますがたべるわけにはゆきません、お嬢さんは、

「ポチおあづけだよ、よだれがでてる〜。」

ポチは、じつと我慢してゐました。

「よし。ポチ」

ポチは、大急にバクリとたべてしまひました。それで、そのお團子がどの位あいしかつたのか分りませんでした。

「まあ、ポチは、一口にたべてしまふんだね。こんどのは、落ついて食べるんだよ。」

お嬢さんは、今一つのお團子を高く上げて、

「ポチ、ワンとあいひ。」

ポチは、大きい聲で、

「ワン」

「もう一度」

「ワン」

「もう一ぺん」

「ワン、ワン〜〜。」

おだんごを頂いたポチは、それをくわへて、自分のお家にもつて行つて、少しづつ、

「おいしい〜。これはほんとうのおだんごだ。

おいしいおいしい。」

といつてたべました。

随分、長い間、食べたかつたおだんごでしたからさ、ぞあいしかつたことせう。

おしまい

昭和五年十二月七日夜書